
魔法少女リリカルなのはStrikerS～神速の戦士～

kikiyuyu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikeS（神速の戦士）

【Nコード】

N0116U

【作者名】

kikiyuyu

【あらすじ】

少女が出会ったのは神速の仮面の戦士

プロローグ (前書き)

やっちまった・・・

思いつきで書きました

もう片方の小説もよろしくお願いします

あと、感想・アドバイスもお願いします

プロローグ

燃え盛る炎の中、1人の少女が歩いていた・・・

少女「お父さん・・・お姉ちゃん・・・」

ドカーン！

少女「ああ！！」

爆発が起きて少女は天使の像ま前まで飛ばされた

少女「痛いよう・・・熱いよう・・・こんなのいやだよ・・・
帰りたいよう・・・」

ピシっ・・・

像にひびが入り・・・

少女「ひっく・・・えっぐ・・・」

ビキッ・・・

少女「誰か・・・助けてえ！」

バコーン！

像の台座が壊れ、像が少女に向かって倒れる

少女「?・・・?!っ」

天使の像が少女に迫ったそのとき・・・

『CLOCK OVER』

紅い装甲をした何かが突然現れ・・・

『ONE TWO THREE』

? 「ライダーキック・・・」

『RIDER KICK!』

? 「はっ!」

ドゴーン!

回し蹴りで倒れて来た像を破壊した

少女side

なに? 何が起きたの?

? 「大丈夫か?」

そう言われた方を見ると紅い鎧みたいなのを付けた人? がいた

？「怪我はないか？」

少女「う、うん・・・」

？「そうか・・・良かった・・・」

マスク？で顔が分からないけど多分悪い人じゃないと思う

？「君、名前は？」

少女「スバル、スバル・ナカジマ・・・」

？「スバルか・・・いい名前だ」

そ、そんなこと言われたら照れるよ／／／

ス「うつ・・・」フラッ

？「おっと」

だめ・・・もう動けない

？「ここも危ない。脱出しよう」

ス「うん・・・」

ドコーン！

そのとき上から爆発音が聞こえて、バリアジャケットを着た魔導師の女の人 came

女の人「君！大丈夫？！」

あの人確か・・・

女の人「?!」時空管理局の高町なのはです!その子から離れなさい!

そういつてなのはさんはマスクの人?に向かって杖を構えた

ス「待って!この人は私を助けてくれたんです!」

な「え?・・・本当ですか?」

マスクの人?は頷いた

それを見たなのはさんはゆっくり降りてきた

な「あの・・・すみませんでした」

?「構わん・・・それより・・・」

ヒョイ

ス「へ?・・・」

そう言って私を所謂お姫様抱っこした

ス「え?え?」／／／

?「この子を頼む」

そう言って私をなのはさんに預けた

な「あなたは どうするの?」

?「俺は大丈夫だ。自力で出る・・・」

そのまま行こうとするマスクの人?を引き止めた

ス「ま、待って！」

？「・・・なんだ」

ス「あなたの・・・名前は？」

マスクの人？は人差し指を上に向けて言った

？「俺の名前は・・・カブト・・・仮面ライダーカブトだ」

ス「仮面ライダー・・・カブト・・・」

カ「ではな・・・クロックアップ」

右腰を叩くと

『CLOCK UP!』

という機械みたいな声が聞こえた次の瞬間にはもういなかった

な「消えた?・・・でも、あれなら大丈夫そうだね」

その後、私はなのはさんに連れられて、そこから脱出した

だけどそのあと、その人とは意外な形で再会を果たした

ブログ (後書き)

何やってんだろぅなあ・・・俺は・・・

まだ片方終わってないのに・・・

多分こっちは不定期というか気分で更新します

第一話 ファーストアラート（前書き）

ぐうだぐうだの
ぐうちゃぐうちゃです

はあ・・・頑張ろう

第一話 ファーストアラート

あれから4年くらい・・・だったか？
くらい経ち、場所は変わって機動六課

時間が飛んだ？・・・そこは詮索しないでくれ

そこではまだ若い少年1と少女3、それと女性？1が戦闘訓練らしきものを

と言うより戦闘訓練をしていた

少年少女組は既に体中がボロボロになっていた

余程きつい訓練をしていたんだろう

だがそれはもうそろそろ終了するようだった・・・

スバルside

こんにちは、お久しぶり、初めまして。

スバル・ナカジマです！

って私誰に言ってるんだろう？

ま、いいや

今私はここ、機動六課で戦技教官の高町なのはさんのもと

訓練校からのパートナーのティアことティアナ・ランスターと

若干10歳でBランク魔導師のエリオことエリオ・モンディアル

そして龍召喚士のキャロことキャロ・ル・ルシエ

と一緒に六課のフォワードとしての訓練をしています
訓練は・・・すっごくきつい！

でも、大変だけどやっていけばもっともつと強くなれると思うから
がんばってます！

強くなったら、またあの人に合えるかな？・・・

な「はい！整く列！」

あ、なのはさんが呼んでる

よくし！もう一頑張りしよう！

訓練所side

な「じゃ、今朝はここまで。一旦集合しよ」

フォワード「はい！」

といってバリアジャケットを解除するなのは

な「さて、みんなもチーム戦に大分慣れてきたね」

フォワード「ありがとうございます！」

な「ティアナの指揮も筋が通ってきたね。指揮官訓練、受けてみる
？」

ティ「いや、あの。戦闘訓練だけでいっぱい입니다」

そんな和気藹々としてる中・・・

エ「？なんか焦げ臭いような・・・」

キヤ「そういえば・・・」

ティ「あ！スバル！あんたのローラー！」

ス「え？」

言われてみるとスバルのローラーブーツから煙が

さらに、無理をしたのかバチバチいつてる

よっぽど長く使っていたようで、ボロボロだ

ス「うわっ！やば！・・・あっちゃあ・・・しまったあ。無理させちゃったあ」

な「オーバーヒートかな？あとでメンテナンススタッフに見てもらおう？」

ス「はい・・・」

な「ティアナのアンカーガンも、結構厳しい？」

ティ「はい・・・騙し騙しです」

な「みんな訓練にも慣れてきたし、そろそろ実践用の新デバイスに切り替えかな？」

ス「新・・・デバイス？」

ところ変わって少し前の六課隊長室

そこでは六課隊長八神はやてがいる・・・のだがなんでか悩んでいるようだ

は「うーん・・・」

？「どうしたんです？はやてちゃん」

そう聞いてきたのは融合機ユニゾンデバイスのリインことリインフォースツヴァイ

融合機とはまだ謎な部分が多いデバイスで、普通のものと違い生き
ていると言っても過言じゃない

は「あ、リイン。あのな、本日付で陸士108部隊からこっちに配
属になる人のことなんやけどな」

リ「はい、それがどうしたんですか？」

は「あまり詳細なことが書かれてとらんのよ」

といってリインに見せたものには

名前 天道総司

年齢 18歳

所属 陸士108部隊

経歴 4年前に民間協力者として管理局に入る

1年後試験を受け、嘱託魔導師となり陸士108部隊に配属

さらにその1年後、Aランク魔導師試験を受け、一発合格

そのときのタイムは管理局最速を記録した

とだけ書かれてあった

・・・十分過ぎるな・・・

というかあなたは管理局のなかでもエースと呼ばれる人たちをほと
んど集めておいてまだ足りないと言うのか？！

リ「・・・Aランクを管理局最速でって、すごい人が来るんですね」
は「そうなんよ。しかも紹介してもらったのがナカジマ三佐やから
間違いんやけどな」

ナカジマ三佐とは聞いての通りスバルの父親である

は「まあ、どんな人かは来てからのお楽しみやな。何でも任務遂行中に決まって、それが終わり次第こっちに合流するんや」
リ「どんなひとなんですかね？」

で、その本人はというと、紅いバイクに乗って走っていた

総「意外と時間がかかってしまったな。少し急ぐとするか」

ブオオオオオオオオン！！

アクセルを吹かしてスピード上げた
目指す場所は機動六課・・・

戻ってデバイスルームside

そこにはフォワードメンバーとリイン、メガネを掛けた女性がいた
女性の名はシャリオ・フィーニ。通称はシャーリーだ
で今4人は自分たちの新しいデバイスを目の前にしてるところだ

ス「わあ、これが」

ティ「あたしたちの、新デバイス・・・ですか？」

シャーリー「そうです！設計主任私。協力なのはさん、フェイトさん、レイジングハートさんとリイン曹長」

ティ「はあ・・・」

エ「ストラーダとケリケイオンは変化なしかな？」

キャ「うん、そうなのかな？」

リ「違いまーッス！変化なしは外見だけですよ」

キャ「リインさん！」

リ「はいですう！お2人はちゃんとしたデバイスの使用経験がなかったですから、感触になれてもらうために、基礎フレームと最低限の機能だけで渡してたです」

エ「あ、あれで最低限？！」

キャ「ホントに？！」

ま、そりゃあ今までので最低限といわれればな

リ「この子達はまだ生まれたばかりですが、いろんな人の願いや思いが籠められて、いっぱい時間を掛けてやっと完成したです。ただの武器や道具とは思わないで大切に、だけど性能の限界まで思いっきり使って欲しいですう」

シャーリー「この子達もね、きっとそれを望んでるから」

な「ごめんごめん、お待たせ」

リ「なのはさん！」

シャーリー「ナイスタイミングです。ちょうどこれから機能説明をするところ・・・」

ビー！ ビー！ ビー！

これから説明と言うタイミングでアラートが鳴る

ス「このアラートって?!」

エ「一級警戒体制?!」

いきなりハードな実戦の始まりだった

第一話 ファーストアラート（後書き）

次こそあいつを・・・

第三話 再開（前書き）

読んでくれるだけでも嬉しいです

第三話 再開

戦闘を開始して早一時間

予測よりも大量のガジェットに六課の面々はてこずっていた

ス「でええええりやああああ!!」

ドゴンツ! ズガン!!

ティ「はああああ!!」

ビュンビュン!! ドガン!

ス「ちよつと?! これって多すぎない?! 全然減らないんだけど?」

ティ「そうね、確かに多すぎ・・・ね?!」

ビュン! ズガン!

ティ「?! スバル! 後ろ!!」

ス「え?」

スバルの後方からガジェットが迫る

ス「?!」

スバルが直撃は免れないと思ったそのとき

ブオオオオオン！！

ガン！！

キイイイイイ！！

紅いバイクがガジェットを突き飛ばした

ス「え？え？」

ティ「スバル！大丈夫？」

ス「う、うん。今のって？」

ティ「分からない。一体誰かしら？」

スバル side

なになに？一体なに？！なにが起きたの？！

？「大丈夫か？」

そのときバイクに乗った人がバイクから降りて私に聞いてきた

ス「は、はい。あの・・・あなたは一体？」

ティ「そうね、あたしも教えて欲しいわね」

？「？八神隊長から何も聞いていないのか？」

ティ「八神隊長から？」

隊長からって・・・何も聞いてないけど
なんでそんなこと聞くんだろ？

？「まあ、急遽決まったことだから仕方ないか」

そう言ってその人はヘルメットを取って右人差し指を立てていった

？「おばあちゃんが言っていた。俺は天の道を行き、総てを司る男、
天道総司だ」

ババーン！！

って感じの音が聞こえてきそうだった

総「本日付で機動六課に転属となった。よろしく頼む」

ティ「はあ、よろしくおねがいます」

ス「よ、よろしくお願いします！」

ちょっと暗くて見づらかったけどよく見るとかっこいい人だった

総「さて、無駄話は終わりにしてこいつらを片付けるとするか」

といって1人前に出る

ってちょっとちよつと？！

ス「待って！さすがにこの数を1人でやるのは無理だよ！」

ティ「そうよ！無謀すぎるわ！」

見ただけで30機くらいあるよ?!

総「なに、この程度の数、俺にとってどうということは無い」

そう言って手を上に掲げた

総「来い!カブトゼクター!」

そういうと何処からともなく紅い虫みたいなのが飛んできた
それを天道さんは掴んで

総「これが、俺の力だ。変身!」

紅い何かを腰のベルトに装着した

『H E N S I N』

そんな電子音がきこたと思ったら天道さんの体が金属に包まれた!
その姿はともおもそうな重装甲の顔も覆う鎧だった
でも、騎士甲冑とも何か違う感じだった

総「行くぞ」

そのまま敵陣に突入していった

総「はっ！」

手に持った片手で扱える位の大きさの斧「カブトクナイガン・アックスモード」でガジェットを一機、また一機と叩ききる

総「ふっ！」

今度はガンモードにして撃つ撃つ撃つ！
全て命中させ次々と数を減らしていく

ス「す、すごい・・・」

ティ「そんな・・・あたしたちがアレだけ苦戦したガジェットをいとも簡単に・・・」

ビューン！

総「くっ！」

敵のビーム攻撃が当たる

ス「あっ！」

ティ「やっぱりあの形態、重装甲だから動きが鈍い」

やはりその重さからか、ちよくちよく攻撃が当たる

総「む、なかなかやるな・・・なら」

そう言うときゼクターの角の部分を軽く前に倒す
すると、装甲が軽く浮き上がる

総「お前達、伏せていろ」

ス・ティ「へ？」

総「キャストオフ」

角を完全に倒す

『CAST OFF!』

バーン!!

ものすごいスピードで浮き上がっていた装甲がはじけ飛ぶ

マスクドアーマー

ス「わあ!？」

ティ「ちよっ!？」

・・・2人とも何とかぎりぎりでかわした

ス「・・・え？」

ふとスバルが総司のほうを見て唖然としていた
そのとき丁度顎のローテートを基準にカブトムシの角を模した「カ

ブトホーン」が起立
している途中だった

総「そういえば……この姿を見せるのはあの時以来か……久しぶりだな」

カブトホーンが定位置に収まる

『CHENG BEETLE』

電子音がして「カブト・ライダーフォーム」となった
ちなみにさっきの重装甲タイプは「マスクドフォーム」という

総「スバル」

ス「うそ……天道さんが……カブトさん？」

今のスバルの始まりである空港火災のときの恩人との再会した瞬間
だった

総 side

そうか、あの時の子がここまで大きくなったか……
時間とは経つのが早いものだな

・・・さて、

総「話したいことがあるだろうから、とっとと終わらせよう」
ス「え？」

俺はクナイガンをクナイモードにして左で逆手に持つ
そして

総「いくぞ。クロックアップ」

右腰のスイッチを叩く

『CLOCK UP!』

一瞬にして回りの景色がスローモーションになる

総「はっ！」

そんな中を俺は高速で動きどんだんガジェットを破壊していく

しばらくして

総「最後の機か」

こいつは確か？型という奴だったか・・・なら
カブトゼクターの上部にあるボタンを頭の方から順に押す

『ONE TWO THREE』

ゼクターの角を一旦元の位置に戻し

総「ライダーキック」

もう一度倒す

『RIDER KICK!』

総「はあ!!」

それを回し蹴りで放つ

まともに食らった？型は爆発した

『CLOCK OVER』

で、丁度クロックアップも終わった

スバルside

『CLOCK OVER』

そんな電子音が聞こえたと思ったらそれと同時にカブトさんが目の前に現れてガジェットが爆発した

ス「す、すごい・・・」

ティ「アレだけの数を、本当に一瞬で・・・」

・・・本当に一瞬だった

総「さてと、早く任務を片付けるぞ？」

ああ！そうだった！

レリック回収しなきゃ！

ティ「スバル！いくわよ！」

ス「うん！」

総「俺も最後まで付き合おう」

その後私たちは無事、レリックを回収して中央に護送した

??? side

とあるラボのようなところで1人の人物と映像に映った女性がさっきの作戦の映像を見ていた

? 「刻印ナンバー9。護送体制に入りました。追撃戦力を送りますか?」

? 「いや、やめておこう。レリックは惜しいが彼女たちのデータが取れただけでも十分さ。しかし・・・」

? 「?、どうしました?」

? 「これは一体なんだろうね?」

そういつて見たのはカブトの戦闘映像だった

? 「この装甲にこのスピード。まったく謎だな」

? 「はい、その意見には同意します。この人物について調べてみますか?」

? 「ああ、お願いするよ」

? 「わかりました」

女性の画面が消えた

？「ふふふ・・・まさか、私にも分からないものが存在するとはな・
・興味深い」

そのまま映像を見続けた

？「だが・・・私はあれほどの数を送った覚えはないのだが、はて
？なぜだろう？」

？（言えない・・・一桁間違えたなんて・・・）

第三話 再開（後書き）

勢いあまって書いてしまった

つぎはザビーあたりが出せるといいな

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0116u/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS～神速の戦士～

2011年10月9日01時08分発行